

2021. 8. 22 (日) マタイ26:51~54

**26:51** すると、イエスと一緒にいた者たちの一人が、見よ、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落とした。

**26:52** そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。

**26:53** それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。

**26:54** しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」

<説教>

主イエスはゲツセマネの園で、十二弟子の一人イスカリオテのユダによって人々に引き渡されました。

〈イエスは彼に「友よ、あなたがしようとしていることをしなさい」と言われた。そのとき人々は近寄り、イエスに手をかけて捕らえた〉(26:50)のでした。

〈人々〉とは〈祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆〉(47)のことですが、彼らは(先主日に申しましたように)〈剣や棒〉という「武器」を持って治安維持に当たるローマ帝国軍兵士、そしてユダヤ人の祭司長やパリサイ人たちから送られた下役(下級役人)たちがその主な人々でした。

彼らがイエスに〈近寄〉ったときも、そしてついに〈手をかけて捕らえた〉ときもイエスは彼らに何の抵抗もしませんでした。

しかし、〈見よ〉〈イエスと一緒にいた者たちの一人が、〉〈手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落とした〉(51)のです。

この〈一人〉とはペテロのことです(ヨハネ 18:10)。

〈耳を切り落とした〉のは、おそらく実際にはペテロはその〈しもべ〉の首を切り落とそうとしたのですが剣の扱いに慣れておらず、打ち損ねたのでしょう。

「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、…」(35)、また「あなたのためなら、いのちも捨てます。」(ヨハネ 13:37)と言っただけあって、このときペテロはイエスが捕まらないように、と必死であり善意あり熱心だったのでしょう。

しかし(何事もそうですが)いくら人間が何事かに必死とか善意とか熱心であっても、それが主のみこころにかなっているか否か、ということが大事であり、問題なのです。

ペテロのしたことは主のみこころにかなっていませんでした。

「**剣をもとに収めなさい。(なぜなら) 剣を取る者はみな剣で滅びます (から)。**」(52)とイエスはペテロにお命じになり、説明なさいました。

ペテロのしたことには全く正当な理由がないものでした。

何よりもそれは主の命令(みことば)に基づいたものではありませんでした。

〈イエスの周りにいた者たちは、事の成り行きを見て、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。そして、そのうちの一人が大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。〉(ルカ 22:49,50)と書かれています。

しかし、このようにイエスに聞いておきながらイエスの答えがないうちに実行しているようですから、これはもう主が何と言おうと俺はやるぞ、ともうそのときには決めていたのではないかと思えるほどです。

人々は剣や棒で武装していたとは言え、彼らがイエスに近寄って手をかけて捕らえたときにそれらの武器を使いはしませんでした。

それはそのときイエスが抵抗しないで捕らえられたからでした。

しかしペテロはイエスの指示もないのに、自分の方から〈手を伸ばして剣を抜き〉先制攻撃を仕掛け（「やられる前にやっちゃまえ」とばかりに）、しかも実際に〈大祭司のしもべ〉の〈耳を切り落と〉して傷つけたのです。

これはペテロ自身だけでなく他の弟子たちにも危険を与えかねない愚かな行いでした。

イエスが「やめなさい。そこまでにしなさい」と言われ、大祭司のしもべの耳にさわって彼をいやされたとルカ 22:51 には書かれています。

もしこのときイエスがそうやって特別に介入してくださらなかったらペテロを始め弟子たちはローマ兵たちによってひとたまりもなく殺されていたでしょう。

なぜなら〈剣を取る者はみな剣で滅び〉るからです。

それは直接にはペテロに対する警告でしたが、同時にイエスを捕まえるたために武装してやってきた（そして更には常に武装していた）ローマ帝国軍兵士たちも、また彼らの武力（暴力）に頼っていたユダヤ人指導者たちも聞くべき警告の言葉でもありました。

事実それから30数年後にはエルサレムはローマ帝国の軍隊によって陥落し、神殿も破壊されることになり、圧倒的な軍事力・武力を誇ったローマ帝国もやがて滅びることになるのです。

〈剣を取る者はみな剣で滅びます〉とのイエスのみことばの正しさは、今に至るまでの世界の、日本の歴史も証明するところです。

さてペテロはイエスをお守りするために自分の〈手を伸ばして剣を抜き〉必要は全くありませんでした。

なぜならイエスはいつでも〈父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐ〉ご自分の〈配下に置いていただくことが、でき〉るお方だからです(53)。

しかしそのときはその力を行使なさらず、父のみこころに従って、〈こうならなければならないと書いてある聖書が〉〈成就する〉(54)ためにイエスは人々の手に引き渡され捕らえられ、十字架の死へと向かわれました。

それは私たちがまず〈私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持〉つ（ローマ 5:1）ためであり、その〈神との平和〉に基づいて〈平和をつくる〉（マタイ 5:9）ためです。

では〈剣を取る者はみな剣で滅びます〉とのイエスのみことばを恐れ謹んで受け取り、武力その他のあらゆる暴力に頼らずそれらを行使しない私たちキリストの教会は何の助け守りもなくこの世に放り出されているのかと言えば、絶対にそうではありません。

いつでも〈父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐ〉ご自分の〈配下に置いていただくことが、でき〉るお方が「見よ。世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」（マタイ 28:20）と約束してくださっているのです。

私たちキリストのからだ（教会）は神によって（みことばと聖霊によって）守られてい

るのです（犯罪や災害のときには警察（場合によっては自衛隊）という「剣の権能」によって助けられ守られるということはあるにしても、本質的、究極的には、です）。

イエスは〈この世と調子を合わせる〉（ローマ 12:2）ような罪・悪魔との妥協による「無抵抗」をお命じになったものではありません。

〈キリスト・イエスの立派な兵士として〉（Ⅱテモテ 2:3）私たちは〈神に従い、悪魔に対抗し〉（ヤコブ 4:7）、〈悪を離れて善を行い、平和を求め、それを追う〉（Ⅰペテロ 3:11）べきです。

〈剣を取〉って〈剣で滅び〉ないために私たちキリストの兵士は〈神のすべての武具を身に着け〉て闘うのです（エペソ 6:10-18）。